

---

# 占い師

はしもと なおや

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

占い師

### 【Nコード】

N7418V

### 【作者名】

はしもと なおや

### 【あらすじ】

占いを受けることになった僕は、その占い師に胡散臭さを感じた。その胡散臭さは何なのだろう。どこから出てくるのだろうか。

僕は偶然街のなかで占い師に声をかけられた。街かどで小さな机を出してろろそくを灯していた。金曜日の夕暮れ時だ。季節は夏で夕立が起こりそうなどんよりとした空だった。声をかけられたのは僕が占いを好きそうな顔つきをしているのかもしれない。でも、占い師なら声をかけて引っかかる人とそうでない人の差くらいはわかってほしいものだ。まあ、僕が引っかかるだろうと思って声をかけたことにはしておこう。その方がなんとなくよさそうだ。その占い師は、一般の占い師の例外に漏れずに、とにかく胡散臭かった。僕は実際に占いが好きだし、過去にも四回くらい占いをしてもらったことがある。占いの種類はそれぞれ違ったけれど、胡散臭さだけは共通していた。結局はどんな職業に就いたって胡散臭いのだろうと思う。教師なら教師になるために生まれてくる人なんていなくて、「あなたは教師ですよ」とか「僕は先生だ」とかいうことがあって教師になる。だから、どこかに胡散臭さがないとおかしい。占い師も同じで、占い師に見えるようにしておけば占い師なのだ。特に急いでいるわけでもなかったので、値段だけでも聞いてみることにした。これで三千円以上だったらなしだ。ちよつとしたおしやれなTシャツでも買おう。

「ありがとうございます」「いや、まだ決めたわけじゃない。「学生ですね。普通だと三千円だけど、今は人通りが少ないから二千円でいいよ。で、僕のいいところは運勢とか結果とかだけじゃなくて、これからどうすればいいのかを教えることだよ」

「じゃあ、お願いします」と、言うしかなかった。僕は立ち止ったことを少し後悔した。特に性格とか向いている職業とかを占ってもらうことにした。

占い師は、まず人相、手のひら、手の甲、という順番で僕の運勢を確かめていつていた。僕はその間、占い師の様子を観察した。僕

はこういう作業が好きなのだ。医者とか先生と面談をしているときに、ほくろの数とか目を何回泳がすのかを数えて分析してみたりしていた。今は、大学生になってそういう機会も減ったが友達と話しているときなんかは無意識に数えている場合もある。ちなみに、この占い師は、四〇代前半の男性、一六五センチくらいの中肉中背、スーツ姿でコックさんみたいな帽子をかぶっていた。聞くことはできなかつたが、おそらく髪の毛がなくなっているか、後退しているかどちらかだ。目をそらさず、爪がきれいに切られていた。爪が気になったのは、僕自身が爪を今日の朝に爪を切ったからだ。俳優に似ていると思っただけで、どうしても思い出せなかつた。

「そうですね。良い運勢してますよ。」

占い師は、目を輝かせながらそう言った。その言葉を聞いてほつとした。これで「もう人生取り返しがつかない」とでも言われたら、僕はもう背を向けて帰ってしまったかもしれない。

「まず、人から信頼を得ることができません。今もそうなんじゃないかな。人間関係がともうまくて、明るいですね。いや、自分ではそう思っていないとしても、明るいです。根本的なところは。だから、将来的に上司とか先輩とかにすごく優しくしてもらえます。他人からは、なんでも頼まれちゃうタイプかな。だから、ちよつと損な役回りですけどね。このポジションをキープしていけば結果は必ず出るはずですよ。ただ、あなたの場合感情の浮き沈みが激しいので、そこだけ注意してください。言ってみれば飽きっぽいですよ。やる時はものすごく頑張るけれど、やる気をなくすと何もしなくなる。やる気をなくしたときにもしっかり頑張っていけばもっと良くなると思いますよ」

占い師はそこまで言い終わると、えへん、というような顔をして僕を見た。僕は聞いている間は、「はい」「うーん」「なるほど」などといった相槌をこれでもかというほどに打っていた。確かに言われてみればその占いが当たっているような気がした。というよりも僕の人生をそのまま見てきたような診断結果だった。けれど、僕は

どうしてもその占いが、というよりもその占い師の胡散臭さが鼻に触った。

もう占いも終わりになるうとしていている時に、僕は思い切って恋愛について質問を試してみた。

「恋愛ですか。いいですよ。もう一度手を見せてください」  
ペンライトを使ってもう一度僕の手相を覗き込む。

「お客さん」彼はそこで一息置いた。僕は恐くなり唾を飲み込む。

「お客さん、優しいんですよ。だけど、女を泣かせますよ」  
占い師の目がギロツと僕の顔を睨みつけた。

「だから、あなたは一人の女性を大事にしたほうがいい。この人こそ、と思った人じゃなくちゃ恨まれるだけです。そのやさしさに女性が寄ってきて、なんとなく付き合うことがあるかもしれません。それも何回も。でも、後々本気じゃないっていうことが分かりますよ。だから恨まれちゃうんだ」

僕はお礼を言っ、立ち去った。その通りだ。僕は女から恨まれる。ついさつき、なんとなくつき合っていた女に恨まれてきたばかりだ。

僕は、あの占い師に胡散臭さについていろいろと考えてみた。けれど、考えてみればみるほど僕自身に対しても信用ができなくなってしまうような気がした。あの胡散臭さは、本物だからこそそのものだ。きつとそうだ。そう思わなければやっていけない。僕は、また新しい恋人を作ってしまったのだから。作らないためにはどうすればいいのか、聞くべきだった。

(後書き)

僕自身が占いを受けたことをもとに作品を書きました。結果もだいたい似せて作りました。占ってなんであんなに信じちゃうんでしょうね。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7418v/>

---

占い師

2011年10月8日18時08分発行